

## ぼくがおばけと出あった夏

徳之島町立亀津小学校 二年 たけ田 かいと

ぼくの家にはよくおばけが出る。といっても、それが分かるのは、ぼく一人なんだ。

ぼくが一ばんはじめに気づいたのは、一年生の夏休みだ。二かいで弟とあそんでいる時のこと。一かいにはだれもないのに、赤ちゃんのなき声がしていた。気になってぼくは下に行き、赤ちゃんをさがしてみたけど、どこにもいなかった。何かいるぞ。

しばらくすると、こんどは、だれもないしんしつで足音がした。ぼくがちかづくくと、足音が聞こえなくなる。ぼくがはなれると、また足音が聞こえてくるのだ。やつぱりこの家には何かいる。おばけ？

「だれかいるの？」

へんじはなかった。ぼくは足ががくがくした。

つぎの日、ぼくがべんきょうしていると、いきなりつくえのひき出しが、ドタンドタンと、かっぺにあいたりしまったりした。ぼくは、びっくりして声も出さず、いすからころげおちた。何をしたいんだ。そのままリビングへはしりこんだ。

その夜ねていると、きゆうにくるしくなった。目をあけると、天じょうに赤い目が四つあった。ぼくを

にらんでいる。ぼくは、とびおきて、ふたごの弟がねているとなりのへやへにげこんだ。弟に、これまでのふしぎな体けんを話した。

「それは、きつとおばけのしわざだ。お兄ちゃんだけが分かったんだね。」

「そうなんだ。」

「おばけと話し合ったらいいんじゃない？」

「どうやって？」

「夜中に天じょうにむかって話しかけてみたら。」

「いやだよ。夜はこわいから、昼に、おばけの正体を見てみよう。」

「昼間はあかるいから、おばけはどこかにかくれているかもよ。」

「じゃあ、『おばけ出てこい』と大きな声で言ってみよう。」

「……分かった。やってみよう。」

二人でるすばんをしているとき、おばけに話しかけることにした。ぼくがさきに、話しかけることになった。ぼくはどきどきしながら、天じょうにむかってさげんだ。

「おばけ、出てこい！」

しかし、へやの中はシーンとしていた。つぎに、弟が大きな声で、

「おばけ、いつになったら出てくるの？」

と言った。すると、おしいれの中から、

「こんなあかるい時間に何ごとだ？」

と声がした。ぼくと弟はびつくりして、

「ひーっ。」

と言った。ほんとうはへやからにげたかったけど、  
がまんしておばけに話しかけた。

「夜中に天じょうでにらんでいたけど、どうしてそ  
んなことするの？」

「それはぼくには家ぞくがないから、きみたち家  
ぞくがうらやましいんだ。」

とおばけが答えた。ぼくは、目玉が四つなのに家ぞ  
くがないのをふしぎに思った。

「なぜ一人なのに目玉は四つなの？」

と聞いた。するとおばけは、

「家ぞくや友だちがいるように見せかけたいから、  
目玉だけでもふやしたんだ。」

と言った。

「家ぞくがいなくてさびしいのなら、ぼくたちとな  
かよくくらそうよ。」

とぼくが言うと、弟が、

「さんせい。」

と言った。おばけはすこしだまっていたが、

「ありがとう。」

とやさしい声で言った。

ぼくたちにはおばけのすがたが見えないので、し  
りとりをすることにした。ぼく、弟、おばけのじゅ  
んで言っていた。

「おばけ。」

「けいと。」

「トラック。」

「くも。」

「もも。」

「もうふ。」

「フルーツ。」

「トマト。」

そして、さいごにおばけが、

「ともだち。」

と言った。ぼくと弟はにこっとして、

「ぼくたち今日から友だちだよ。」

と言った。

それから、おばけはぼくをこわがらせなくなった。

「おやすみ。」

と言うと、

「おやすみ。」

と言って、いっしょにねているようだ。

こうしてぼくと弟とおぼけはなかよくなり、夜もぐ  
っすりねむれるようになった。